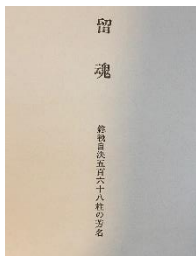


第二百三十二話 至高・至純の日本精神の発露：世紀の自決！

「世紀の自決 日本帝国の終焉に散った人びと」（額田坦・上法快男 編、芙蓉書房出版、1991.3、550p）改訂版）の凶書を国立国会図書館で閲覧した。終戦自決五百六十八柱の芳名を複写して貰った。その概要を紹介する。

1 終戦自決五百六十八柱の芳名概要



芳名録には、氏名、身分（階級等）、職務、自決場所、自決年月日及び本籍の一覧が掲載されている。

- ・ 大将7名（全て陸軍）、中将17名、少将10名、大佐22名で、将校259名である。他は下士官、兵であり、軍属、雇員並びに看護婦の名前もある。本人のみならず、令夫人やご母堂、愛子と共に自決した例も14例ある。
- ・ 陸海軍別では、陸軍が圧倒的に多い。
- ・ 自決場所は日本国内のみならず、海外まで幅広い。
- ・ 自決の年月日は、8月15日かその数日後が多く、「終戦の詔勅」を拝聴した後に色々な思いをもって自決されたのであろう。
- ・ 参考までに、大将の自決者は、阿南惟幾陸軍大臣、安藤利吉台湾軍司令官、杉山元第一総軍司令官、田中静彦東部軍司令官、吉本貞一第一総軍司令部付、柴五郎大将（予備役享年85歳）、本庄繁（枢密顧問官）である。全て陸軍大将だ。因みに海軍将官の自決者は、大西瀧次郎中将（神風特攻隊の創始者）、宇垣纏中将（玉音放送後に特攻自決）、佐藤四郎少将（第27特根）及び升田仁助少将（第64警備隊司令）である。
- ・ 陸軍少佐 晴気誠（大本営陸軍参謀 陸士46期、佐賀県出身）の項には、「氏は大本営参謀として国軍の悲境を招いた責任を自ら負い絶えず死所を求めていたが、終戦の翌々十七日夜半市谷台上の大本営馬場の上にある大正天皇御野立所に正坐し同期生の益田兼利氏を介添として依頼し、古式に則り軍刀により割腹自決を遂げた。」との紹介の後、「晴気少佐を憶う」として同期生羽場安信氏の手記等が掲載されている。遺書や家族の手記が掲載されているケースもあり、その人となりも簡潔に述べられている。

2 自決者の想いは如何なるものであったのか？

- ・ 戦争若しくは敗戦の責任者としての自分なりの責任の取り方だったのか？死をもってお詫びするのは日本的な美風であったのだ。日本人が桜を好むのは、その散り際が潔いからだと言う。最高の責任の取り方である。杉山元帥は、「敗戦の責任、万死も及ばず」との意を自ら体現した。
- ・ 戦友や死んだ部下との靖國で会おうとの約束を果たすための云わば後追い自決だったのか？
- ・ 自分なりの天皇に対する忠義、お詫びだったのか？阿南大将の遺書には、「一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル」とある。
- ・ 進駐軍に対する抗議、異議申し立てだったのか？連合国の支配下に甘んじる事を潔しとせずとの意識が強かったのだ。
- ・ 民間でも日本の降伏に反対する自決者が相次いだ。また、諸般の事情により、記録されていない自決者も多数いたのではないだろうか？
- ・ 皇国の必勝を信じていたにも拘わらず、突然の敗戦に茫然自失の状態となり、前途を悲観し、将来を儚んだ自決者もいないではないだろうが・・・。

3 若干のコメント

- ・ 陸海軍で自決者数に懸隔が大きいのは、軍種の特性か、主戦論の陸軍と海軍の差か？
- ・ 終戦に伴う自決者の大分は公務死と認定され靖國神社に合祀されている。

（了）